京都橘大学　女性歴史文化研究所　開設二五周年記念シンポジウム
「食の歴史とジェンダー　―日本とアジア―」Ⅲ

『食とジェンダー』の視点から

南　直　人

単なるコメントを越えて、いくつもの論点について詳しく語っていただきました。インドネシアの事例について非常によくわかったと思いますし、共食にもさまざまなスタイルがあり、孤食・個食にもいろいろあるということにつきまして、あらためて「なるほど」と思いました。

食とジェンダーは、密接に関係していますが、どのように関係しているのかを立ち入ってみていくのは非常に難しいところがあります。この機会に私からは、基本的な問題提起を少しおこなってみたいと思います。

ジェンダーという言葉は、必ずしも市民権を得ているわけではないので、もう一度、初歩的な言葉の意味から振り返ってみたいと思います。あらためて広辞苑やウィキペディアなどを調べてみますと、広辞苑には「生物学的な性別を示すセックスに対して、社会的・文化的に形成される性別」のことであると書かれていて、少しわかりにくい説明です。これに対してウィキペディアは、信頼性の問題もありますが、いちおう広く共有されている知識ということで紹介いたしますと、「ある社会において、生物学的男性ないし女性にとってふさわしいと考えられている役割・思考・行動・表象全般を指す。男性にとっては男らしさであり、女性にとっては女らしさである」と書かれていて、こちらの説明のほうがわかりやすいかと思います。

ただ、よく言われますように、いまや「男らしい」「女らしい」という言葉はある種のセクハラ用語になりつつあります。さらに、女らしさを押しつけることが女性の活躍や女性の社会進出阻止の論理につながりやすいという意見も強まっております。一般的にはこうした考え方がだんだん定着しつつあるとはいえ、人によって大きな差があり、こういう言葉を発するのがパワハラやセクハラであるということがわかっている人と、まったくわかっていない人との差もまた大きいとい

うのが実態です。

私はこのシンポジウムのテーマを考えたとき、最初に「食とジェンダーの問題が結びつく」というアイデアがパッとひらめきました。食とジェンダーとの関係でいえば、やはり性別役割分担論(端的にいえば「男は外で働き、女は家を守る」という論理)について考えねばなりません。最も端的な例が家庭内の食をめぐる関係であり、「夫は料理をせず、妻のみが料理をする」というようなことが問題となってきます。

古い話ですが、「わたし作る人、ぼく食べる人」という、一九七五年にハウス食品のCMで流れたキャッチコピーをめぐる問題が思い出されます。具体的な商品名は忘れました(たぶんめん類だったと思います)が、これが「男女の性別役割分担を固定化する。問題だ」という抗議を受けて、放送が中止されました。こういうところに端的に食とジェンダーの問題が現れてきます。

ジェンダーと食が関わる事例は、他にもさまざまあります。たとえば、これは日本に限定した話かもしれませんが、最近は「酒を飲むのは女らしくない」と言う人はほとんど絶滅しつつあるのではないかと思われる一方で、「甘いものを好むのは男らしくない」という感覚は、案外まだ残っているかもしれません。つまり、甘いものとアルコールに関する対照的なジェンダー規範があるわけです。

これがあるのは日本だけかもしれない。というのは、たとえばヨーロッパなどに行きますと、筋骨隆々とした男性が喜々として甘いケーキを食べています。それがべつに何の不自然なこともない情景としてみられます。

「女性のほうが甘いものを嗜好する」という言説も、多くは科学的根拠に基づいて「男女にこういう生理的な差があるから、こうなった」というものではない。実際に科学的に見ていくと、じつは生理的な差はほとんどないとされているようです。とくに甘みについては、私が知っている限りでは、ネズミの研究では若干の性差があるということを聞いたことがありますが、おそらく圧倒的にいわゆる社会的な規範(「女性だから甘いものが好きなはずだ」というような先入観)に基づくことが多いのだろうと思います。

食とジェンダーに関する数少ない関する研究として、味の素食の文化センターを中心とした論文集があります。これは、同センターが毎年開催している「食の文化フォーラム」の一九九九年度分の研究成果をまとめたもので、『食とジェンダー』というタイトルで二〇〇〇年に刊行されました。きょうはこの本の編集をされた竹井恵美子先生が出席されていますので、私の説明で間違っているところがあれば指摘していただけたらと思います。

このフォーラムでは、先ほどの原田先生のお話にもありました狩猟採集社会における性別分業の話や、韓国社会、あるいは台湾の先住民社会の食における性別の話、日本の近代村落社会での男性調理担当者の話などがある一方で、自然科学的なアプローチとして、嗜好における生理的な格差についての報告もあり、その中では、じつは甘みなど

の嗜好について男女の生物学的な性差はほとんどないという結論が示されております。

さらに、メディアのなかの食とジェンダーの表現、とくにテレビCMの分析もありますし、拒食や過食にみられるジェンダー規範の問題の報告もありました。食とジェンダーの問題は、いろいろな学問分野でまさに学際的な研究が必要になってきますが、この論文集はその出発点になるような研究ではないかと思います。

こうした研究をふまえまして、これは原田先生への質問というよりは全体的な問題提起ですが、先ほどのご講演にありました家族の起源と共食に関わる問題です。狩猟採集社会での性別分業(男性が狩猟、女性が採集)について、先ほどの『食とジェンダー』という論文集のなかでは、アフリカのブッシュマンに関わる文化人類学的研究だったと思いますが、狩猟するのは男性のみで女性はそれに参加しないかというと、そうでもないという事例も紹介されていました。それが家庭内での食の供給をめぐる男女の役割差をもたらしたとは必ずしもいえないだろうという結論でした。これをどう考えればよいのかというのがひとつめの問題です。

もうひとつは、共食の意義と現在という、原田先生のご講演の最後の部分です。現代の日本で孤食などがいろいろ問題にされていて、それは原田先生のお話のなかで若干相対化されますが、やはり孤食や育児放棄の問題が論じられる際に「これは母親の責任だ」というような論調がいまだに多いと思います。

母親が家庭内で食事を提供する役割を果たすべき、という考えに基づいてこうしたことが言われるわけですが、では父親はどうなのか、あるいは社会全体として母親が深夜に働かざるをえないような状況をどう考えるのか、というより大きな問題として考えるべきかなと思います。

阿良田さんのコメントに対する私の質問は、きわめて初歩的な素人の質問でして、まず第一はイスラムの教義とジェンダー問題はどう関係するのかということです。それと、女性が砂糖菓子を作ったりするのは、やはり甘みと女性とを結びつけるようなジェンダー観があるのか。こういうところがちょっと疑問に思った点です。

きょうは、何らかの結論を出す場ではなくて、さまざまな問題提起をふまえて、こういう問題もある、こういう問題もあるということを考えていきたいと思っています。(休憩)